

び ぶ り お



VOL. 11 NO. 2 The University of the Ryukyus Library Bulletin 1978. 10. 30

秋 に 思 う

中 松 竹 雄

(一)

南国もミーニシ（新北風）の吹く季節となった。「秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる」と昔から詠われているが、校庭のがじゅまるの樹陰からこぼれおちる陽ざしも日一日とやわらかく光ってみえる。

人間には激しい運動をした後、休息が必要である。全力を投入して論文を書いた後など、私たちの心をなごませるものは、なによりも自然のみどりに接するときである。

人には強さと弱さが同居している。要は何に力を尽くし、何に弱さ（やさしさと言いかえてもよい）を発揮するかである。普通の人間ならば、誰もこの世に生を受けた以上は、なにか彼自身の存在を人生の意義ある仕事に結びつけたいと思うだろう。そしてその願いは、すこしの努力によってかなえられるからである。

人の寿命がおよそ70年とすれば、どんな凡人であっても、70年の歳月をかけて努力すれば、何か一つぐらい、世の中のために役立つ仕事ができるはずである。

しかし、あれもやりたい、これもやりたいと心が定まらず、ゆれ動いては、70年の人生もあっというまに過ぎ去ってしまう。

できるだけ人生の早い時期に、特に青春時代に心を燃やせるような自からの人生の目標をみつけることのできる人はしあわせである。彼は努力によって目的を達成できるであろう。

けれども、たとい晩年にみずからの生きるめあてをさぐりあてたとしても、それに向って努力さえすれば、充実した日々を送ることはできる。

この長い人生の道程を、緊張と緊張の連続で過ごすことは、至難なわざである。それはある種の人間にとっては可能であろうが、ある種の人間にとっては、必ずしも可能であるとは限るまい。

(二)

大学の教官になるということは、その生涯の仕事として、学問の道を選んだことを意味する。言うまでもなく、大学の教官は研究と教育とに従事しなければならない。琉球大学も大学の一つであり、しかも沖縄県に一つしかない国立大学である。国立大学の教官は、いわば国民の税金によって養なわれているようなものだ。つまり研究と教育を通じて、国民にその義務をはたさなければならない使命をおっている。

ところで、わが愛すべき大学の教授の中に、年に一篇の論文もものせず、まして一冊の著書もまとめることもせず、その上それをはじめることもなく、大きな顔をさげて、校庭をかつぼする者はいはしないだろうと信じる。教授の基礎的資格の中に博士の学位を有することとある。博士の学位を有していない場合は、それに相当する研究（と教育）の業務を有していなければならない。これは全国の大学の基準だといわれる。すくなくとも大学の教官として、この程度の資格はそなえていなければならないという必須の条件であると解される。

大学を良くしていくためには、もちろん、教室や研究の施設設備などの物的条件を良くしていく必要がある。そのためにも、琉大は千原の新キャンパスに移転統合するのがよい。

しかし、いくら設備備品などの物質的な条件を整備しても、それを利用する人間の側、つまり教官と学生の側の問題をぬきにして、大学の発展はありえない。そればかりではなく、研究も教育も進歩はしないであろう。

いま沖縄県下では、児童生徒の学力の問題がクローズアップされ、学校教育のあり方に対する批判の声がかまびすしい。たしかに小中高校における教師の指導力の問題は軽視できない。ところで、それに対して、大学はなんら責任を問われなくてよいであろうか。そもそもそういう教師を養成したのは大学ではなかったのか。いま大学は、教員養成のあり方を厳しく問われるべきである。私たち個々の教官が反省し、努力しなければならないこともあろう。そればかりではなく、大学が組織として、はたしてどういう教師を養成するかという体系としてのあり方が問われていいはずである。個々の教師の力量を高めることはもとより必要である。同時に教師集団としての責任が問われそのあり方が改善されない限り、所期の目的は達成されないであろう。

(三)

そのためにも、いま私たち個々の人間にできることから始めなければならない。

当りまえの話であるが、良く論文を書く人ほど、良く論文を読んでいるようだ。良く論文を読んでいる人がつねに良い論文の書き手であるとは限らないが、良い論文の書き手で、良い論文を読まない人はいないであろう。

学者にも個性があるから、数十年に一篇あるいは数年に一篇ずつ、すばらしい力作を発表していく人もあるだろう。また毎年一篇か数篇ずつ発表していき、その中から何篇かは学界を裨益するような仕事をのこしていく人もあるだろう。あるいは生涯に一篇だけ後世に残るような珠玉の論文を書いていく人もあるかも知れない。だから一概にどうこうとは言えないが、やはり、活発に研究と教育に専念することが、私たち学徒の使命であることにはかわりはない。

(四)

その意味では、私の専門と関連づけて述べるならば、新キャンパスにおける新しい琉球大学附属中央図書館の中に、是非とも「テープ・ライブラリ」を設置していただきたい。このことは単に私だけの希望ではなく、ひろく言語学を研究する者の願望であろう。私の手元にあるだけでも、方言を録音したテープが数十本はある。民話や歌謡の類まで含めると、おそらく数百件は下らないのではないか。こういう生の資料は、できるだけ多くの人が利用できるようにした方がよい。みんなが個人で所有している録音テープを再録して一堂に蒐集するだけでも、どれほど学界のために益することか。できれば、それを内容別に整理分類し、文字化して利用すればいろいろな利用のしかたが考えられる。学生の卒業論文の資料としても役立つ。

いずれにせよ、図書館は学者の魂である。そこに行けば、私たちは、あらゆる時代を越えて、あらゆる国の人びとと心をかよわすことができる。そういう図書館が出来ることを皆で心がけようではないか。

(国語学専攻・教育学部教授)

雑誌の選択受入状況について

—琉球大学附属図書館における—

まえがき

参考業務の一環として、教官・学生の要求や、他大学又は学外者からの文献複写依頼などがあって、雑誌論文の検索を行っているが、該当雑誌がとぎれたり、欠巻欠号になっているものがあつたりして困惑することがある。雑誌は継続講読することによってその価値も高まると思われるのだが、講読雑誌の中止が多いのではないかと疑念が湧いてきたので、雑誌の選択受入状況はどのようになっているのか、過去10年くらいまでさかのぼって調査してみることにした。

1 雑誌の選択について

毎年度10月末までには雑誌を発注をしなければならないので、夏休みが明けると、すぐ準備にかかり、各学科主任あてに現在購読中の雑誌リストを添えて購入希望雑誌リストを9月末日までに提出してもらおうよう文書で依頼することになっている。従って学術雑誌の選択は、各学科・各専門分野の教官によってなされている。日本復帰以前は各学科から購入希望雑誌のリストを提出してもらい、図書館で調整し、又図書館が大学図書館として必要と思われるものを付加して、図書館運営委員会に提案して購入決定がなされていた。復帰後は受益者負担のたてまえから、各学科から提出された購入雑誌の予算は各学科から醸出することになったので、事実上雑誌の選択権は各学科にあり、図書館では重複雑誌を調整し、その購読料金の割りふりをして、図書館運営委員会で承認を求めただけにすぎない。学術雑誌は一旦中止してしまうと、その分は欠号欠巻となり、後日における補充は困難を極める。たとい補充できても高価なものにつく。図書館で継続することが望ましいと考えても、予算上から、又受益者負担のたてまえから学術雑誌の選択権は前述のとおり各学科にあるので、復活講読は図書館の意志ではできない状況である。但し、一般教養雑誌や学生に頻繁に利用される雑誌については「一般共用雑誌」として図書館で選択し、図書館運営委員会に提案され、加除されて購入が決定されている。購読雑誌の予約から支出までの概要は次のとおりである。

1) 予約発注

各学科、研究所等から提出された購読希望雑誌と一般共用雑誌のリストを調整し、洋雑誌は10月下旬頃予約発注する。(最近書店より9月末までには予約発注してほしいとの要望がある)洋雑誌の初号は1月発行のものが多く、時期を失すると初号の入手が困難となるので注意を要する。

和雑誌は初号が4月発行のものが多く、翌年2月頃までは発注可能である。

2) 契約

予約発注された雑誌のうち、入手可能になった雑誌について4月に購入契約を結ぶことになっている。

3) 前金払い

購入契約を結んだ雑誌のうち、初号が入荷し、価格が確定したものについて、80%の前金を支払うことになっている。これは契約時点で支払うべきものであるが、予算執行上の都合で6—7月頃支払っている。

4) 受入と欠号補充

予約発注し、契約された洋雑誌は、発行元より直接送付されてくるので、逐次これを受入れている。

未着や、欠号が生じた場合は、契約書店と連絡して補充するように努めている。迷い郵便や何らかの理由で未着となり、欠号となったものは複写してでも納品させるようにしているが、一旦欠号となったものは補充することが極めて困難な場合が多い。

5) 精算

前金払い80%の残金20%分を支払うために精算を行う。年度途中で廃刊、休刊になったり、何らかの理由で欠号が生じて、納品不可能なものなどを料金支払いから除外し、精算して、2月までに納品されたものについて、3月に残金を支出することになっている。

2 購読誌数の変遷

復期以前は、図書館は独自の予算で運営されていた。図書費の中に占める雑誌費の割合は30%程度が見込まれていたが、雑誌数の増加と洋雑誌の値上りのため35~40%を占めるようになっていた。1968年(昭和33年)度の決算を見ると表1のとおりとなっていて、復帰時までこの割合は殆んど変らなかった。

表1 1968年度 図書費配分及び執行状況

	予 算	%	決 算	%
図 書 費	\$40,000.00	57	\$44,224.73	62
雑 誌 費	22,000.00	31	26,419.79	37
バックナンバー費	8,000.00	12	662.00	1
計	70,000.00	100	71,306.52	100

(琉球大学附属図書館年報 1968年度 P37第4表より)

次に昭和43年から52年までの10年間の雑誌受入種(タイトル)数を示すと表2のとおりである。

表2 年度別雑誌購読誌数

昭和	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
和	537	537	525	548	534	534	646	646	670	691
%	100	100	97	102	99	99	120	120	124	129
洋	514	519	559	638	836	836	757	764	905	912
%	100	101	109	124	162	162	147	149	176	177
計	1,051	1,056	1,084	1,186	1,370	1,370	1,403	1,410	1,575	1,603
%	100	100	103	113	130	130	134	134	150	153

表2によると昭和43年度を100とした場合 昭和53年度は153となり、10年間に購入雑誌数が53%増加している。特に洋雑誌は77%の増加を見ている。復帰前の琉球政府立大学の時代はゆるやかに増加の傾向にはあったが、日本政府援助による保健学部の増設による雑誌の充実と更に復帰後国立大学となって大学の拡充と相まって雑誌のタイトル数も大きく増加してきた。

昭和47年5月15日の復帰を境に琉球大学の予算のあり方も国立大学なみとなった。復帰当初の昭和47年度は前年11月に洋雑誌は予約発注済であったので、従来通りの方法で購入されたが、昭和47年11月4日の第68回運営委員会において、雑誌の購入金額の負担は受益者負担とすべきであるとの意見の一致を見たので、図書館で購入雑誌を各学科へ割り振りして、昭和48年から受益者と見なされる各学科が負担することになった。しかし雑誌の性格上自然科学全般に共用されるものや、生物学や化学分野の雑誌のように、多くの学科や専門分野にまたがって利用されるものがあったりして、一学科に割り当てるのは不公平であるものが出てきた。昭和48年10月24日の第71回図書館運営委員会において検討した結果、雑誌

の購入は受益者負担とし、二学科以上で購入請求するものは購入費用を等分して負担することになった。更にこの際購入雑誌を根本的に洗い直すべきであるとの意見の一致が見られた。図書館ではその議にもとづいて、各学科主任あてに、雑誌選択の依頼文書に購読誌学科別リストを添付して送付した結果、多くの中止雑誌と新規購入希望雑誌のリストが集まり、多くの雑誌の異動を余儀なくされた。この傾向は昭和51年度購入雑誌まで続き、ある学科が中止した雑誌を他の学科がとるようになったり、全く中止になったものや、2年後に復活したもの等、昭和48年の雑誌選択（49年購入分）から昭和51年度までは購入雑誌の異動が激しい時期であった。これらの雑誌の推移は表3のとおりである。

表3 年度別中止、新規購入雑誌統計表

昭和	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
前年度誌数	1,051	1,051	1,056	1,084	1,186	1,370	1,370	1,403	1,410	1,575
中止誌数			12		14		55		101	15
%			1.1		1.2		2.6		7.2	1.0
新規誌数		5	40	102	198		88	7	266	43
%		0.5	3.7	8.8	14.5		6.3	0.5	16.9	2.7
現在誌数	1,051	1,056	1,084	1,186	1,370	1,370	1,403	1,410	1,575	1,603

注1 中止誌数の百分比は前年度誌数に対するものであり、新規誌数の百分比は現在誌数に対するものである。

注2 新規誌数の昭和46年の102種及び昭和47年の198種は主として保健学部新設によるものである。

表3で解るように復帰前は購入雑誌の中止は殆んど見られず割合に安定していたが、復帰前後から雑誌種数は増加したが購入中止の雑誌も多かった。しかし昭和52年以降は安定する傾向を示している。文献探索をする中で中止雑誌が非常に多いのではないかと感じたが、統計数字を出して見ると思ったより少い異動であると言わざるを得ない。又昭和49年度と51年度の両年度に中止になった156種のうち多くのものが復活購入されている。

あ と が き

雑誌室は完全開架式であるので利用者は、自ら資料を探索し、利用しているので、自分で見つけ得ない資料を参考調査係へ探索を依頼してくる。無いものを依頼してくるので、無いものが多いわけだが、その中にたまたま中止になった雑誌が多かった。「良く利用される雑誌を中止するとは何事か」とお叱りを受けることになったわけである。昭和52年以降は異動が少なくなって安定する方向にあり、又一旦中止になったものも多くが復活購入されたり、一般共用雑誌として拾い上げたりしているので、今後はスムーズにサービスができると思われる。更に図書館間の相互協力によって他大学図書館への文献複写依頼と図書相互貸借や国立国会図書館から図書の借用や、複写サービスを受けて、どうやら資料不足を補って、参考業務を遂行している。

中止になった雑誌がどれくらい何時復活購入されたか調査する予定であったが、時間と労力がかかりすぎると思われたので割愛することにした。なおこの機会に付言しておきますが、教官の中には雑誌は消耗品であり、必ずしも図書館で備えつけなくてもよいとの誤解から個人配分の研究費で購入し、継続を中止する向きもあるやに聞いており、これは校費の一部であると同時に大学の設置基準における学術雑誌の種類数にも重大な影響を及ぼすものであり、総ての学術雑誌が中央図書館で揃えられ領域を越えた種々の論文が閲覧でき、かつ又情報提供、相互協力に大いに役立つような一次資料の充実に努力しなければならないと思われる。

事務長 平 良 恵 仁
参考調査係長 山 田 勉

故石井照久氏所蔵資料の受贈について

国立国会図書館が沖縄県内の図書館との協力援助業務の一環として、各機関からの寄贈資料 11,912 冊を 5 トン、コンテナで沖縄図書館協会へ送付してきた。昭和 52 年 6 月 1 日沖縄県立図書館に到着した資料のうち、琉球大学附属図書館、沖縄国際大学図書館、沖縄大学図書館の三大学図書館へは、故石井照久氏所蔵資料 4,239 冊の配分があり、78 箱のボール箱詰であった。これらの資料を箱詰のまま 3 等分して 26 箱ずつ即日分配し、重複資料がある場合はお互にゆずり合うことが合意された。本館に配分された 26 箱には雑誌やパンフレットは少く、重複資料も殆んどなく、単行本が主であった。民法、商法、海商法、労働法、法学等の専門書が殆んどで、大学図書館にふさわしい貴重な資料が多く、冊数は 1,228 冊をかぞえている。次に現代人物事典、朝日新聞社編、1977 年により故石井照久先生の略歴を紹介しておきます。

石井照久（1906～1973）イシイテルヒサ

労働法、商法学者、1906（明治 39）年 11 月 23 日佐賀県小城町生まれ。育ちは東京で、府立一中、一高を経て、31 年東大法学部卒業、直ちに法学部助手となり、田中耕太郎指導の下に商法を研究、33 年助教、44 年教授となる 67 年東大を定年退職後、成蹊大学教授、同大学学長、73 年 7 月 16 日死去、指導的商法学者でもあったが、海商法研究の一部としての海上労働法への関心が、末広巖太郎の影響により戦後に労働法への本格的取り組みに深化（62 年法学博士の提出論文は「労働法総論」）。左右の対立鮮明な労働法学界において「石井労働法」は中庸の学風である点から、労働関係法の立法の中心的役割を果たすとともに、政府の労働関係委員に重用された。東京都地方労働委員会会長当時は不当労働行為審査手続きの迅速化をはかった。58 年中労委委員、66 年同会長、会長としては地味ながら労使の自主性の育成、尊重に努めた。（岩崎稜）

図書館事情

<出張> 5 月 10 日（水）～13 日第 8 回九州地区国立大学図書館協議会及び第 29 回九州地区大学図書館協議会（於大分県別府市）へ具志幸昌館長、平良恵仁事務長出席

6 月 13 日（火）～17 日第 25 回国立大学図書館協議会（於筑波大学）へ具志幸昌館長、平良恵仁事務長出席

<臨時図書館運営委員会要録> 日時：9 月 26 日（火）15：15～17：00

場所：会議室（プレハブ 2 階）

審議事項：（1）昭和 53 年度及び 54 年度における外国図書の収書計画について（文部省特別予算）

<第 115 回図書館運営委員会要録> 日時：10 月 16 日（月）15：15～17：00

場所：会議室（プレハブ 2 階）

審議事項：（1）文部省配当外国雑誌購入経費（自然科学系）による購入雑誌の選定について

（2）昭和 54 年度購入雑誌の選定について（継続購入雑誌）

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第 11 巻第 2 号〔通巻第 40 号〕

昭和 53 年 10 月 30 日 発行人 平良恵仁 沖縄県那覇市当蔵町 3 丁目 1 番地

電話 34-0101（内線 338）